

バイロイト大学ドイツ語研修に参加しての感想 (2018年8月)

国際総合学類 2年 A.K.

はじめに

私は今回のドイツ語研修において、かなり緊張していた。それと同時にとても楽しみにしていた。なぜなら今回のドイツ語研修には「初めて」が多かったからだ。

まず、今回が初めてのヨーロッパ訪問であった。私は大学受験で世界史を選択しており、長きにわたって世界の主役であったヨーロッパに行けることをとても嬉しく感じていた。また、海外に一月ほど滞在するのも初めてであった。一月ほど同じ場所に滞在することで観光客とは違い、現地での生活の雰囲気を感じられるのではないかと期待があった。最後に今回が私にとって初めてのホームステイであった。友達の家には大体一泊しかしたことが無く、また、祖父母の家も近く、帰省はいつも日帰りなので、他人の家に一泊以上するのがそもそも初めてであった。そのため、外国の方の家に三週間もお邪魔するのはかなり自分にとって大きなチャレンジだったといえる。

そんな「初めて」が詰まった私のドイツ語研修での感想を勉強、人間関係という二つの面から書いていく。

勉強

私は事前のテストで A2-1 クラスに入れてもらうことができた。同じクラスに同じく筑波大学から来た IさんとOさんとTさんがいたので心強かった。

授業は全部ドイツ語で進められた。最初は全く分からず、1個下の全部英語で教えるクラスに移ろうかと考えたこともあった。それでも先生が「3日くらいしたら慣れてきてわかる単語が増えてくるはずだから頑張れ!」と言ってくださり、その言葉を信じて頑張ることができた。もちろんわからない単語ばかりだったが、だんだん言っていることがわかるようになって嬉しく思った。最終日には簡単な内容ならドイツ語だけで会話できるようになったのも嬉しかった。

バイロイト大学の授業を通じて日本における外国語教育について考えさせられた。ドイツ語の授業では①ドイツ語を積極的に生徒が使っていくこと②反復すること③ゲーム性を持っていることが重視されていると感じた。そのため、午前中の計3時間の授業でもあつという間に感じた。たぶん頭を使っていたからだと思う。例えば過去形を学習した日には、基本の過去形の形を学んだあと、まず隣の人とペアになって自分の昨日あった出来事を5つずつ説明しあうという課題をこなす。そのあと、一人ひとりに小さな紙が配られそこに書いてある条件(例:昨日買い物をした人、昨日ビールを飲んだ人など)に合う人を質問しながら探してメモする。それが終わると、一人ずつ「AとBとCは昨日買い物をしていました。」などと発表し、言われた人はいくつかの先生の質問に答える。(Aは買い物で何を買ったのか、どこで買い物をしたかなどと聞かれる。)このアクティビティを通して生徒たちは、自分で文章を考えることを求められ、それをゲーム形式で反復することで効果的にかつ楽しみながらドイツ語を学ぶことができる。自分が受けてきた外国語教育では教科書を読み、先生の話聞き、黒板に書いてあることをノートに

写すことが中心だった。よく日本の教育は受け身であり、外国での教育ではもっと積極性が求められるという話を聞くが、それを直に感じられたのは、教育について勉強している身にとって良い経験となった。

人間関係

人間関係について感じたことを三つにわけて書いていく。

一つ目はいろんな国の友達ができたことについてだ。私のクラスでは台湾日本ロシアの生徒が多かった。ロシアの子はあまり英語を話せないという子が多く、ドイツ語が堪能だった。ドイツ語があまりできない私は英語の話せる台湾の子と仲良くなった。一緒に夕飯を食べたりショッピングしたりを通して、いろんな話ができてとても楽しかった。ある日のコミュニケーションの授業のあとにアジア人差別の問題について議論した。このように普通の会話だけでなく、身近な問題についての意見を交わしあうことができたのは良かった。別れる際にも、台湾に来るときは連絡してねと言ってくれて本当にうれしかった。

二つ目はドイツの家族についてだ。前述の通り、私はホームステイをしていた。家族はとてもやさしく、ドイツ語も英語もうまく話せない私に気を使い、簡単な英語で話しかけてくれた。また、いろいろな場所に連れて行ってくれたりもしてとても良い経験になった。ホームステイをして気づいたのは、ドイツ人は家族の時間をとても大切にしているということであった。どの家にも外に椅子、テーブル、バーベキューセットなどがあり、夕方に大学から帰るときには、多くの家族が外でお酒や食事を楽しんでいるのを見かけた。ドイツでは日曜にスーパーがやってなかったり、24時間営業もなかったりするから、働いている親の家にいる時間が日本より長いという根本的な違いがあるとは思いますが、それでも夜に家で食卓を囲む時間を大切にしているところは、日本人が忘れかけている（やむを得ずおぎなりにしがちな）部分なのではないかと感じた。

三つ目はドイツ人の外国人に対する態度だ。授業で先生が「ドイツ人全体が移民に反対してるわけではなく一部だ。我々のほとんどは外国人がドイツに来ることを歓迎している」と言っていた。ホストファミリーは「ドイツ人は君が困っていたら必ず助けてくれる」と言ってくれた。その言葉の通り、ドイツ人は私にとって親切であった。20 kgのスーツケースを持っていたら、階段や電車で多くの人が手伝ってくれた。道を聞いたら一緒に目的地に行ってくれる人がいた。間違えて反対方向の電車に乗ったとき、乗換の駅で一緒に降りて正しいホームに案内してくれた人がいた。これは一部に過ぎないが、初めての地で戸惑う私を多くの人が助けてくれた。同じ状況の外国人が日本にいたとき、上記のことを私はできていただろうか。見返りを求めずに親切にしてくれた優しいドイツ人の心に触れて、今一度自分の行いを振り返ろうと思った。

最後に

私はこの一か月間で多くのものや出来事に触れ、そこから多くを学ぶことができた。ここでの学びをこれからに生かしていきたいと思う。本当にバイロイト研修に参加できてよかったと思う。ありがとうございました。

Die Sommeruni von Bayreuth war die großartige Erfahrung. Ich konnte viele neue Freundinnen bekommen. Natürlich kann ich jetzt besser Deutsch sprechen als damals, als ich nach Bayreuth geflogen bin. Es gibt einige Leute, die sagen, man müsse nicht nach Ausland gehen, um Sprachen zu lernen. Aber ich glaube, das ist der beste Weg für mich, weil ich jeden Tag neue Wörter finden und benutzen kann. In Japan ist es schwer für mich, diese Erfahrung zu bekommen.

An jedem Vormittag hatten wir den Unterricht. Unsere Lehrerin heißt Julia. Sie ist sehr nett und schön. Wenn ich einige Wörter nicht gekannt habe, oder wie zu sprechen, dann hat sie immer freundlich gewartet und unterrichtet. Wir haben gelernt: wie Brief zu schreiben, wie die Uhr zu lesen, welche Adjektiven sind richtig, wie einkaufen gehen, welche Präpositionen und welche ist die beste Kombination, ob Dativ oder Akusativ, usw. Wir haben auch Musik gehört, Songs von deutschen Sängern gehört und Clips von den Migrantinnen gesehen. Beim ersten mal war es sehr schwer zu verstehen. Mit der Zeit, ich konnte mehr Wörter hören, die unsere Lehrerin sagte. In der letzten Klasse haben wir Essen von unseren Ländern gekocht und mitgenommen. Alles Essen haben neu für mich geschmeckt. Aber natürlich war Japanisches Essen am besten.

In der Klasse am Nachmittag haben wir die Aussprache und Gespräche trainiert. Erster mal war es auch schwer, besonders die Aussprache von „R“. Aber als ich in Bonn angekommen bin, habe ich verbesserte Aussprache von „R“ gemerkt. Unser Lehrer heißt Erik und seine Klasse machte viel Spaß. Er hat die Aussprache jedes Studentenen aufgezeichnet und jede Schwäche entdeckt. Danach haben wir die Sommeruni fertig gemacht, er hat uns die Sprachaufnahme geschickt. Er hat jedem Studenten die E-MAIL geschrieben. Ich war überrascht, seine lange Nachricht zu sehen. Unser Lehrer ist am besten! Und ich liebe meine Klassenkameradinnen. Sie sind aus Taiwan, Korea, China, Russland und natürlich Japan gekommen. Wir haben Englisch und Deutsch gesprochen. Ich hoffe, wir können uns eines Tages wiedersehen.

Wir haben an jedem Wochenende die Exkursion gemacht. Ich habe an der ersten Exkursion nach Bamberg teilgenommen. Das Stadtbild war alt und schön. Wir haben den Spaziergang in der historischen Atmosphäre gemacht. Ich habe viele schöne Fotos gemacht. Ich habe nach dem Unterricht Volleyball gemacht und Filme gesehen und so weiter, und dazu habe ich jeden Tag genossen, einkaufen zu gehen und mit Freundinnen zu Essen. Mein Aufenthalt für einen Monat in Bayreuth war gut, damit ich mich an neuem Leben in Deutschland gewöhnen konnte. Ich glaube, mein Deutsch ist noch nicht ausreichend. Aber ich freue mich auf mein Leben in Bonn. Ich nehme an, dass ich meine Sprachkenntnisse dort weiter verbessern kann. Ich schätze alles wert, was mir Bayreuth alles an fantastischen Erfahrungen bietet.

1. 研修では何を学んだか、どんなことをしたか

1-1 午前の授業

授業は午前のクラス（ドイツ語の文法）と午後のクラス（ドイツ語でのコミュニケーション）に分かれていた。午前中のクラスは9:00-12:30で行われた。受講生を国別に見ると、日本人3人、韓国人1人、台湾人2人、アルジェリア1人、ナイジェリア1人、オーストラリア1人、スペイン1人の計10人であった。そこでは主に文法事項を学習した。内容としては、身の回りの名詞とder die dasについて、所有格について、不規則動詞や分離動詞などである。午前のクラスは1時間半ずつ2コマに分かれており、前半で文法事項を学習し、後半にロールプレイング等で習ったものを利用して学習を深めるという流れであった。3時間という時間は長く、最初の1週間は腰が痛くなったが、それでもだんだんと慣れていった。また、先生が豊富なコンテンツとユーモアたっぷりに授業を盛り上げてくれたので、飽きずに授業に臨めた。宿題もたくさん出たが、今思えば、それも力になったと思う。わからない宿題は積極的に先生や友人に聞くようにし、すぐ潰すようにした。

クラスメイトの人の良さも自分が授業に毎日行くモチベーションになった。クラスの中には、オーストラリアから来た御歳82歳の女性もいた。彼女は学生よりも元気で非常にパワフルでよく笑い、私たちにも明るく話しかけてくれた。また、学ぶ姿勢も前向きで、授業中も積極的に質問していた。彼女の主体的に学ぶ姿勢は、本来は私が持つべきであろう「勉強」に対する意識を再考させてくれた。

クラス内にはアルジェリアから来た17歳の男の子もいた。彼から学ぶことも多かった。彼は父の仕事の関係でこの夏からドイツで生活をはじめたばかりといい、秋からはドイツの現地高校に通うという。彼にとってドイツ語は一からのスタートになるため、非常に意欲的に学習していたのが印象的だった。また、異文化に順応しようともがく彼の葛藤からも、色々なことを考えさせられた。ダイバーシティの中で学習できたことは、多様な価値観を知る上で非常に効果的であったと感じる。

1-2 午後の授業

午後のクラスは木曜日を除く週4回の、13:30-15:00で行われた。受講生を国別に見ると、日本人3人、韓国人2人、ナイジェリア1人、ロシア1人であった。午後のクラスでは、コミュニケーションクラスという名のもとに、発音について細かくやった。先生が用意した単語や文章を音読し、それを指摘してもらうことを繰り返した。ときには早口言葉を練習し、いかにつかえずに饒舌に言えるかを競った。特に難しかったのがrの発音である。英語のような巻き舌だけでなく、喉の奥から息を吐くようなイメージで音を出さなければならない。私にとって初めて出会う音だったので、なかなか出せず難しかった。rの音が出せないなあと悩んでいた時に、相澤先生がちょうどバイロイト大学にいらっしゃって、おっしゃられた「あんまり気にしなくていいよ。細かいことを気にしていると置いていかれるから」という言葉が印象的だった。

ドイツ語を使ったゲームにも多数挑戦した。私が特に面白いと思ったのは、絵描当てゲームだ。1人の学生が先生からお題を単語で与えられ、それを目隠しした状態で黒板に描写する。他の学生はそれが何かを当てるのだ。それぞれの学生が絵にくせがあってなかなか当てるのが難しかったが、その分他の人

がどうしているのかを考えているのかを垣間見れて面白かった。また、間違えるたびに新たな単語を習得できるいい機会であったため、このゲームから多数の単語を覚えられた。最も苦手だったのは der, die, das ゲームである。先生が名詞を1つ読み上げ、学生がその名詞に付く冠詞は der die das のどれかを答える。名詞の性には明確な見分け方がなかったため、単語が新出するたびに覚えるのは骨の折れる作業であった。ただ、冠詞を覚えなければ話すことができないので、名詞とセットで覚えていった。

1-3 自習、教えてもらったこと

授業後はその日に習った文法事項や発音について学習した。時に、授業の内容が難しく、授業中に先生の言っていることが分からないこともあった。その際はクラスメートが丁寧に文法の仕組みや発音を教えてくれた。宿題はプリント形式で出たが、わからないところは同様に友人か先生に聞いた。そのおかげもあって、宿題をさぼらずにこなすことができた。

ただ、たった1ヶ月の期間の中で、せっかくドイツにいるからには外に出て経験しようという思いもあった。部屋にこもってやる勉強はほどほどにしようと思い、授業後に行われるプログラムにも積極的に参加した。シティーツアーをはじめとして、ニュルンベルク等へのエクスカージョン、またビーチバレーボールやサッカーなどを通して他の留学生との交流を深めた。彼らとの交流では英語のみならずドイツ語も織り交ぜて会話できたので、生きたドイツ語に触れることができた。このようなアクティビティに参加したことは、語学の上達に繋がっただけでなく、異文化や価値観に触れることができ、よい思い出にもなった。

2. バイロイトでの日常生活

本研修は私にとって、初めてのヨーロッパであったため全てが新しく新鮮に感じた。それと同時に、ドイツ語がままならない私は戸惑うことも多かった。特に初日にスーパーマーケット REWE を利用した際には、レジを通された商品を自分で袋に詰めるとは知らず、後ろの人を待たせてしまった。じろじろ見られて恥ずかしかったのは今でも覚えている。それ以来、一度たくさん買い物をしなくなった。

スーパー以外にも新鮮だったものはある。それは大学の寮での生活である。最も驚いたことは各部屋にオープンがあったことだ。日本でもオープンはあるわけではないだろう。私の日本の家にはなかった。スーパーで買った食材をオープン調理できたのが良かった。また、気になったこととしては、ベットがソファベッドだったことである。硬くて小さくて非常に寝にくかった。一ヶ月それが続いたのは大変だった。また、気温の寒暖差が激しかったのも大変であったが、体を壊さなかったのは良かった。

休日の過ごし方としては、毎週土曜日は学校主催の近隣都市への日帰り旅行があったので、それはとても有意義で楽しかった。バンベルク、ドレスデン、レーゲンスブルグへ行った。ガイドが付いていたため、ただ単に観光するだけでなくその土地についてより詳しく知ることができた。

バイロイトを選んでよかったと思うのは、世界中から学生が集まっていたことである。ヨーロッパやアジアだけでなくアフリカ出身の学生も集まっており、クラスの中に多様性があるのが大変勉強になった。ただドイツ語を学ぶだけでなく、授業中になにげなく行っていた会話が相手の価値観や考え方を学ぶことができた。授業以外にも、休日と一緒に過ごし、近隣の都市への旅行や市民プールなどにも行った。各国の友達とのアクティビティが異なったバックグラウンドを持つ人々の価値観を理解する良いきっかけになった。

3.今後どのようにがんばるか

これから頑張りたいこととして、ドイツ語と留学生との関わりを活性化させるという二点あげられる。

一点目はやはりドイツ語である。帰国後もドイツ語の学習を継続しようと思った。授業では周りの学生が自分より初期からのドイツ語能力が高く、ついていけないのが悔しかった。もっと悔しかったのは、ほかの日本人が語学を駆使して、現地の青年たちと仲良くなっている光景を見た時だった。自分にももっと語学の能力があれば、もう一步踏み込んで話ができるのにな、と。もちろんコミュニケーションは語学だけではない、しかし、それは1つの重要なツールになりうる。その悔しさをバネに、夏季の研修では一生懸命努力して、ある程度まで追いつくことはできた。だが、まだ満足はしていない。今後も引き続き続けることで実力を付けたい。また、私は夏季バイロイト研修の後にオーストリアで数週間を過ごした。オーストリアでも現地語はドイツ語で、その必要性を実感した。世代が上がれば英語を話せない人の割合は増えるし、それ以前にすこしでもドイツ語を話せば、第一印象で好印象を抱かせることができると知った。以上の理由より、ドイツ語をもっと学びたい。

二点目は留学生との関わりを強くするということだ。ドイツでは多くの人に助けってもらって自分の生活ができた。サマースクールのスタッフには、到着日から寮の入居の仕方や授業について、また各エクスカージョンの説明などをしてもらった。ルームメイトにもお世話になった。彼らは私を歓迎し、お酒をご馳走してくれた上に、生活に必要なほとんどのものを貸してくれた。バイロイトについて右も左もわからない私に色々教えてくれた。彼らの助けなしでは自分は大変な苦勞をしていただろう。今度は自分がそのお返しをしたい。日本の、とりわけ筑波に来る留学生の数は年々増えており、日本人の学生によるサポートの必要性も増えている。そこで自分が何かできることがあれば彼らのために助けになりたいと思った。現地での学びは、自らの学習意欲によるが、人との出会いに左右される部分も大きい。自分がバイロイトでそれを実感したし、日本に来る留学生にも極力嫌な思いはして欲しくないと思った。

総じて素晴らしい経験であった。本研修で学んだことを次へ活かしたい。サポートしてくださり、ありがとうございました。

バイロイト大学夏季語学研修の感想

比較文化学類 2年 N.I

ドイツ・バイロイト大学で8月7日から31日にかけて開校された Sommer Universität に参加しました。本レポートはその感想を述べるものです。

まずは一番の目的であった語学研修そのものの感想と、それを受けてどのような変化があったかについて、次にドイツで一か月生活して感じたことを綴りたいです。

そもそも私がこの研修に参加しようと思ったのは、単純にドイツ語が話されている地域でドイツ語を習ってみたいということと、今まで海外に行ったことがなかったので一度行きたいと思ったからです。筑波大に入学するまで、海外は自分とは縁遠いものだと思っていました。加えて、留学（およびそれに類すること）に限らず渡航自体に関する知識がなかったので遠ざけていたところもあります。そのため、今回奨学金がもらえる人数制限に焦って勢いで申し込んでしまって、本当に良かったです。

テストの結果は、どの分野も点数が取れていないと言ってしまえばその通りだったのですが、比較的リーディングが取れていて、リスニングは明らかに取れていませんでした。これは単語力不足が大きいとは思いますが、寮のチューターさんの発した key という英単語すら三回聞き返したので、慣れもあるのだろうと考えました。単語帳を使って単語を覚える時間を毎日とります。また、パイロイトの書店でケストナーの朗読 CD を買うことができたので、それも少しずつ聴きたいです。好きな作品でリスニングの練習ができるってすごいことだと思います。レジで書店員のお兄さんにナイスチョイスのようなことを言われたので嬉しかったです。話は若干変わりますが、ケストナーの CD があったのは児童書のコーナーだったものの、大人向けの本の朗読 CD も多数書店にあって驚きました。日本ではこういうのは子供向けか、目の不自由な方のためのものという位置づけが強い気がします。

また、リーディングが多少良かったのは、春学期に第二外国語の授業と相澤先生の授業でドイツ語の文章に一通り触れる機会があったからだだと思います。また書店の話に戻りますが、散々迷ったあげくカイ・マイヤーの児童書を買ってしまいました。おそらく邦訳が出ていない作品なので、頑張って読みたいと思います。500 ページ以上あります。帰りの飛行機で読んでいたら、隣の席の女性に「ドイツ語の本よね？」と話しかけられました。全然うまく返せませんでした。私は一か月何をしていたんだ……、とさすがに思いましたが、言っていることが分かるようになっただけでも成長だと今は考えたいです。聞かれていることは分かるのに言葉が出てこない状況には、かなりつらいものがあると痛感しました。

さて、ここからは日常生活で感じたことを書きたいです。

まず、スーパーマーケットについてです。研修期間中私はあまり観光をしなかったのですが、本当に一か月暮らしたただけになりました。その中でスーパーマーケットにはたくさんお世話になったのですが、日本とは大きく異なっていて、驚くと同時に興味深かったです。主な驚いた点としては、開店が早く閉店も早いこと、座って打つレジのシステム、やまびこがないこと、が挙げられると思います。三つ目については友人に指摘されるまで気づけなかったもので、驚いたというのとはまた少し違うとは思いますが、発見でした。開店時間について、初日は大学に到着したのが夜の七時過ぎと遅かったので、食料品店は開いておらず、夕飯を食べ逃してしまいました。しかし翌日、フラットメイトの方に連れられて、早朝から歩いて 15 分の REWE に朝ご飯を買いに行くことができました。それからこの一か月、朝早くに起きて買い物に行ってしまう習慣がついたので生活リズム的にもよかったです。つくばでは日付を越える頃になって 24 時間営業のスーパーに自転車を走らせることもしばしばだったので、あまりに健康的でした。さらにレジについてですが、座ってレジ打ちをするスタイルや、ベルトコンベアには少し驚きましたが、よく考えなくても立ってレジ打ちしなければならない理由はないなと思いました。そのことを友人に言ったら、彼女からは「私は日本のスーパーの方が元気のある感じがして好きだな。いらっしゃいませ！ って言われるし」という返事が返ってきて、興味深かったです。それと、レジではほぼ必ず「Hallo」と言われていたので日本に帰ってきてからしばらく、レジに並ぶとき思わず口から出そうになっていました。

また、授業内であったドイツについての話もちろん面白かったのですが、同じクラスの他国の子の話が興味深かったです。私の所属したクラスは女子しかおらず、他と比べると年代も国籍も固まっていた方かとは思いますが、生の声を聴けたのは貴重だったと思います。複数の国の人間が一同に会する場に立ち会う機会がこれまでなかなかなかったので新鮮でした。また、同じ日本人でも大学や学類や性格が異なる人の話は、同じ日本の話をしているのに捉え方や環境の違いが感じられて面白かったです。私個人としては男女格差の話などちょっと日本の悪い点ばかり言ってしまったかな……、と反省するところ

るがあります。

最後に、約一か月の語学研修は、音読が少し上手くなったり、友人が増えたり、ドイツ文学へのモチベーションが上がったり、それぞれ本当に少しではありますが何かしらの実りがあったと思います。秋学期はさらに頑張りたいです。

バイロイト夏期講習で学んだこと・感想

K.K.

約1か月間ドイツに滞在したが、海外に1回かつ4日間しか行ったことの自分にとって、すべてが新鮮で、価値のあるものであった。出発する前は、自分のドイツ語の力で通用するのか、生活していけるのかと不安しかなく、不安：楽しみ=8：2くらいであった。しかし、バイロイト夏期講習を終えた今、ある程度ドイツ語は通じた（もちろん通じない場面もあった）し、ドイツ語がいくらか上達したと思う。たくさん感じ、学んだことはあるが、その中でも印象に残ったことを列挙していく。

まずは、日々の授業について。レベルは高くないクラスではあったが、先生はほとんどドイツ語で話していたため、常に意識的に耳を傾けていた。もちろん、課題内容もドイツ語だったので、当然ではあるが、ドイツ語に触れる機会が日本にいたときの比ではなかった。これが奏したのか、1か月間でヒアリング能力が確実に上がった。また、日本のドイツ語の授業と異なり、文法をガチガチに勉強するだけではなく、日常生活で用いるドイツ語へのアプローチが非常に多かった。そのため、日本では教わらなかった単語やフレーズなどをたくさん学ぶことができた。授業で教わったフレーズを授業以外の日常場面で使ってみて、しっかり通じたときはとても嬉しかった。最初の頃は、通じないことを恐れてあまりドイツ語を使うことができなかったが、徐々に、（特に飲食店やスーパーマーケットで）ドイツ語を使っていった。たとえ発音が下手でガタガタな文法であっても、恐れずに話してみることが大切だと感じた。ドイツ人は、とても優しくてしっかり最後まで耳を傾けてくれたため、非常に助かったし、ありがたくも思った。

次に、ドイツの文化について。バイロイト大学の企画で、みんなでビアガーデンに行ったが、大量のドイツ人が大量にビールを飲んでいる姿を目の当たりにして、仰天した。ドイツ人はたくさんビールを飲むのは知っていたが、想像以上であった。そして、そこで初めてドイツビールをジョッキで飲んだが、美味すぎてこれまた仰天した。自分はあまりビールが得意ではなく、日本でもあまり飲まなかったのだが、ドイツに来てからごくごく飲めるようになった。ドイツのビールが美味しいおかげなのかは分からないが、ビールが飲めるようになったのは今回の嬉しかったことの1つである。スーパーマーケットでの買い物ひとつも慣れないことだらけだった。急いで袋に詰めなくてはならなかったり、飲料のデポジット制度だったり日本とは異なる文化がたくさん観察できた。飲料のデポジット制度のおかげで、ペットボトルをしっかりと返却したが、これは日本でも取り入れてみてもいい制度なのかなと思った。今よりも確実にポイ捨ては減るのではないかと思う。結局、一週間くらいで生活に慣れて楽に過ごせるようになった。

最後に、大学生活ではドイツ人だけではなく、様々な国の人々と交流したことについて。中国、ロシア、台湾、フランス、タンザニアなど普段ではなかなか接することのない人とたくさん話し（英語だが）、ア

フリカの地形や貧困地域の現状、ドイツとフランスの違いなど面白い話もたくさんしたし、自分も日本のおすすめの曲を教えたりした。とても貴重な経験だったし、何よりも楽しかった。

この1か月は自分の人生の中でも最も濃い1か月でありながら、楽しすぎて一瞬であつた。そして何より、ドイツ語学習へのモチベーションが向上し、様々な人と何一つ不自由なく、ドイツ語で会話、コミュニケーションが取れるようになりたいと強く感じた。確実に今回の講習で自分はレベルアップし成長できたように感じる。これを筑波大学の学問にも活かして精進していきたい。そして、機会があればドイツに再び行きたいと思った。

国際総合学類 M.K

自分が興味・関心を持つ分野をドイツの移民・難民問題に見つけ、そこからドイツ留学を決めた。今回のバイロイト大学夏季研修はケルン大学での生活に早く慣れるよう基礎的なドイツ語習得を目指して臨んだ。

研修では、午前中に合計3時間のドイツ語授業を受け、午後から1時間半のコミュニケーションコースを受講した。同じクラスにはフランス・ロシア・イギリス・タンザニア・台湾・韓国・中国そして日本からの学生がおり、習った会話表現や文法を駆使してお互いに会話を行う練習を通して基礎的なドイツ語を身に付けていく方針であつた。元から発言をすることが好きな私は、先生が全体に問いかける質問に分からないときは「分からない」と伝え、分かった際にはその答えをクラス全体に向けて発信することで、先生やクラスメートとドイツ語を使い、正しいドイツ語の文法・発音に直してもらう機会を増やすことができた。ドイツ語初心者の私達であつたが、授業の90%はドイツ語で行われ、先生がするジェスチャーと話している単語とを照らし合わせて少しずつ内容理解を進めた。午前中の授業は主に文法や会話表現・単語を学ぶためのもので、午後のコミュニケーションコースは、午前の授業で習ったことを基に会話を続ける練習や、台本を基にドイツ語で小さな劇を行ったりすることに重点が置かれていた。どちらの授業でもインプットしたことをアウトプットすることが求められたため、自ら発言する機会が十分与えられており、私たちは半ば競争になりながら先生の質問に答えていた。単語をしっかり覚えるのみならず、単語の冠詞とセットで覚えなければ完璧な文が作れないため、授業後は図書館で習った単語と冠詞を復習したり、生活している上で必要な言葉や、街中で見聞いた単語を調べる時間をとるようにした。

授業以外のドイツ語学習として、バイロイト大学夏季研修が催すドイツの映画鑑賞にも週に2回、毎回参加した。とにかくドイツ語を耳にし、ネイティブスピーカーの話す速度に慣れるべきだと考えての参加であつた。しかしながら、字幕はさすがに英語で初歩のドイツ語学習者でも映画自体を楽しめるものになっているだろうと思って参加した第1回目、音声も字幕も全てドイツ語、更には映画の解説をする先生もドイツ語を話すのみで、飛び交う「ドイツ語」の多さに圧倒された。字幕の単語を読もうと何度も目で追いかけたが、話すスピード・字幕のスピードについていけず映画1本を見終わるまでには目や頭に疲労感を感じるほどだった。それでも行き続けた映画鑑賞会。第4回目ほどになると、授業で習った単語や会話の流れも耳にするようになり、映像と併せてストーリーの流れを少しずつだが理解できてい

ることに気づいた。ドイツ語研修の半ばからは、クラスメートと一緒に参加し、理解できないシーンをドイツ語能力の高い学生に聞くなど映画鑑賞会は友達とリラックスして楽しめる場所となった。

このドイツ語研修はその他にも、ナチス統治時代のニュルンベルクの様子を見学できるプログラムの提供やバレーボールやサッカーなどのスポーツプログラム、合唱プログラムや旅行など多岐にわたって、私たちが1か月間の研修を楽しむことができるような催しを提供してくれるなど魅力あふれる研修だと実感した。

私は今回の研修で自分自身に感謝していることが1つある。それは、何か自分にとって初めてのことや、他人に誘われた事に対し「YES」という意思表示をし続けたことだ。これはドイツ留学前に「YES MAN」というアメリカ映画を観て、自分からチャンスを逃さないためになんにでも挑戦しようと思ったことから始まった。そのため研修中は、スポーツプログラムに合唱練習、映画鑑賞にダンスなど様々な経験をした。ドイツ語での合唱は先生の指示が理解できず歌詞も理解できずと、正直苦戦することばかりだった。しかしながら、全体を振り返ってみると、結果的に授業外で男女問わず多くの友達を作り、共に楽しい時間を過ごし、彼らから場面に応じたドイツ語を教わるのができたことは、自分がたくさんことに挑戦してきたからだと感じることができた。研修に参加する中で生涯付き合っていきたい友達に出会えたのもそのおかげだ。特に私は、第2外国語として履修していたフランス語が少しだけ役に立ち、同じクラスに在籍していたフランス人の女性、また夏季研修参加者で行ったビアガーデンで出会ったロシア人の女性と短期間であったが非常に密な友人関係を築くことができた。お互いにドイツ語初心者であり、英語を交えての交流ではあったが、多様なトピックに関して意見を交換したり、一緒に映画館へ足を運んだり、筑波大学でパイロイト大学生から紹介されたアイスクリーム屋さんに行ったり、またメンザで昼食を一緒にとったりする中で彼女達の価値観、そして学生としての魅力にも気づくことができた。約1ヵ月間、彼女たちと毎日一緒にいると、彼女達が今自分に何が必要で自分にとって何が一番幸せかを分かっている女性であることに気づかされた。そして自分もそうなりたいと、考え方や興味の幅を広げようとするようになった。そのような意味で、この研修はドイツ語のみならず私の内面も成長させてくれる良い研修であったと振り返っている。

ドイツ語授業最後の日。約1ヵ月間、朝の授業でお世話になった先生から、「私はドイツ語の先生をすることが自分にとって本当に幸せだろうか悩んでいた。だけどあなた達に出合って、自分がしてきたことに誇りが持てたし、これからも続けていこうと自信を持てた。」と伝えられた。毎朝3時間あるドイツ語の授業、私も生徒として1度も苦痛に思わず、むしろ毎日何が学べるか楽しみに通学していた。いつも笑顔で明るい先生と出会い、愉快でドイツ語を話したくてたまらないクラスメートと毎日のように発言の機会を競争し、笑いながら、また顔をしかめながら受けたドイツ語の授業は1日1日がいい思い出である。数字の教え方に苦戦した日も、ドイツ語で簡単な足し算・引き算ができて算数が苦手な友達と笑いあった日も、単語に合う冠詞が覚えられず英語のように簡単だったと嘆いた日も、みんなで先生に「先生は私達生徒のことが好きですか？」とドイツ語で質問し、「もちろん」という単語をドイツ語で習った日も、今となってはその全てが素敵な思い出である。素敵な街で素敵な出会いをし、ドイツ語を毎日楽しく学べた機会を与えてくれたパイロイト夏季ドイツ語研修に参加することができ、心からありがたく思う。辛い事、苦しい事、楽しい事、うれしい事、これからの1年間の留学でたくさん経験すると思うが、いつでもこの研修を振り返り前向きに頑張りたい。